

エデュコ **Educo**

No.46
2018年



田嶋 幸三さん

(公財)日本サッカー協会会長

巻頭インタビュー p.2

知っておきたい教育 NOW p.4

- ①未来を生きる子どもの視座に立つ学力観を基軸に
- ②学習指導要領の全面実施に向けて取り組む校内研修

きょういく見聞録 p.8

アイヌ文化の担い手を育てる
「ウレシパ・プロジェクト」

地球となかよしトピックス p.10

報徳楽校 生きる力を育もう

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

「遊ぼう！ 写真はことば」で考える
「写真という物語」

コラム p.15

高大接続改革について(2)
英語試験とCEFR

ほっとな出会い p.16

日本理化学工業
代表取締役社長

大山 隆久さん

日本サッカー協会の 使命と願い

公益財団法人日本サッカー協会会長 | 田嶋 幸三さん

指導者育成のための細分化された 指導者ライセンス制度

日本サッカー協会は1970年代から、おそらくどのスポーツ団体よりも早く指導者育成に着手しました。現在8万人の指導者登録があり、上はJリーグのS級ライセンスからD級ライセンス、そして、お父さん・お母さんコーチ、幼稚園で指導するキッズリーダーまでと、非常に細かく枝分かれした指導者ライセンス制度を構築しています。「もつとしっかり踏み込んでいかなないと子どもたちにきちんと教えられない」という高い意識をもって取り組んでいる方がとても多いのです。

「グラスルーツ宣言」サッカーが果たす役割と使命

日本サッカー協会は「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」とを理念に掲げています。サッカーはチームスポーツを通して社会性や仲間と協調する力をつけることができます。これはサッカーだけに限りませんが、子どもの活動は非常に重要だと思っています。

キッズプロジェクト—子どもたちの 身体能力と社会性の発達のために

川淵三郎キャプテンが会長だった時に「キッズプロジェクト」がスタートし、現在も継続しています。子どもたちが一緒にボールを蹴ることでいろいろな動きを覚えていく。転んだり、走ったり、身体接触もあるサッカーを通して子どもたちの心身の

健全な成長に寄与したいと考えています。サッカーにはある特定の部位に極端な負荷がかかるものではありませ

んから、発育期の子どもの非常に適したスポーツです。スポーツ先進国のアメリカではサッカーを経てさまざまなスポーツに移っていく子どももいます。

サッカーはトライアンドエラーで学んでいくスポーツ

トライアンドエラーで学んでいくのがサッカーですから、失敗を重ねることでもまくなっています。事故や怪我が起きないよう準備と教育が必要ですが、実際のスポーツ活動や体育の授業で各単元をしっかりと学んでいくことを考えると、やはりトライアンドエラーをしていく・させていくことが大事ですし、ゲーム環境を多くしてその中で学ばせることも重要です。ブラジルの子どもたちは「サッカーをしよう」と言つてすぐに試合を始めます。試合の中で学んでいくことが、まさに「トライアンドエラー」なんです。試合中にパスミスをしたら「次はこういう練習をしよう」とか、自分から試合の中で必要性を感じたことを



PROFILE

1957年熊本県生まれ。(公財)日本サッカー協会(JFA)会長
筑波大学体育専門学群卒業。古河電気工業株式会社入社。西ドイツケルンズスポーツ大学、筑波大学大学院修士課程体育研究科終了。1994年より(財)日本サッカー協会の各要職を歴任。現在は、国際サッカー連盟(FIFA)理事/カウンスルメンバー、アジアサッカー連盟(AFC)理事、東アジアサッカー連盟(EAFF)副会長、日本オリンピック委員会(JOC)常務理事なども務める(2016~)。2016年3月~(公財)日本サッカー協会会長、EAFF会長。著書に『言語技術が日本のサッカーを変える』がある。

練習するようにしないと。そういう気付きがないと、一方的に教わるだけで身につかないままになってしまうことにもつながるかもしれません。

リスペクト宣言—大切に思うこと

我々は「リスペクト」を非常に大事にしています。「リスペクト」には「相手を尊敬する」「法令を遵守する」「ルールを守る」などいろいろな意味があります。我々は「リスペクト」という言葉を「大切に思うこと」としました。相手や仲間、審判、指導者に敬意を払う、ボールなど用具を大切に、倒れた人に手を貸して起こしてあげる、そういったことは関わるすべての相手を大切に思うからなんです。戦っている相手は「敵」ではなく、「仲間」です。だから誰かが倒れたら、ボールを蹴り出してゲームを一回止めて、ドクターが倒れた人



のところへ行く時間を作ります。スポーツから「リスベクト」の精神を学ぶことはとても多いと思います。子どもには、利己的なところがあります。でも、そういう子どもと一緒にプレイして、「ここは相手の選手を助けてあげなきゃいけない」といった気持ちをもてるようになると、将来、社会人になったときにも同じ思いが出てくると思います。そして最後まで試合を諦めないことも「リスベクト」なんです。どんなに負けていても最後まで果敢に点を取りに行く気持ちがあることが、サッカーの良さだと思っています。そういう気持ちをもっと表に出していきたいと、我々は今、リスベクトプロジェクト「大切に思うこと」を展開しています。それが今、最も重要な活動だと思っています。特にサッカーは自分で判断しないといけない場面が多いスポーツです。自分でいろいろなことを判断して実行できる子どもたちを育成する、スポーツはそれを楽しみながら実践できる最も良いツールだと思っています。

言語技術は「コミュニケーション能力育成と論理教育から」

日本語は主語や述語がなくても話が通じてしまう言語です。英語などの他言語では主語が抜けていると話が通じません。日本語の場合は「阿吽の呼吸」で通じるのかも知れません。しかし一番大事なのは、伝えるべきことを言語化して言うことだと思います。例えば体育の授業では、なぜこれしなくてはいけないのかを説明してあげれば子どもは理解します。要するに言語技術とは「論理教育」なんです。「自分はこう思う、なぜならば」ときちんと説明できればいいわけです。

それには、まず必要な情報をきちんと日本語で伝えられることが肝心です。英語では「なぜなら」や「ゆえに」が当たり前のように使われます。特に東京オリンピックが開催される2020年にはさまざまな国の人が日本へ来ますから、言語技術を学んだり、外国語を習得したりする良いチャンスだと思っています。海外では「阿吽の呼吸」は通じないし、「俺の思っていることを感じてくれよ」と言っても感じ取ってはくれません。サッカーはグローバルなスポーツですから、言語技術の習得はサッカー選手にとっても必須です。

Football for All: サッカーを、もっとうみんなのものへ

サッカーを通じた活動が国際友好につながることも充分にあります。国際試合ではサッカー選手は、試合直前に国歌を歌います。

自分たちの国歌だけでなく、対戦相手の国歌・国旗も大切に思うんです。残念ながらアジアにはまだ紛争地域がありますが、そういう地域でもサッカーをしている子どもたちがいます。今、我々はそういう地域の育成事業をサポートしたり、サッカー指導者を派遣したりしています。国際的活動をしっかりとやっていくことで、サッカーが平和につながって欲しいと願っています。

また、年齢、性別、障がい、人種などに問わず、誰もが、いつでも、どこでも、安心、安全にサッカーを楽しめる環境を整備を図り、どんな人でもサッカーを楽しめるようにしようと呼びかけています。その一環として2016年4月に「日本障がい者サッカー連盟」を立ち上げ、国内の7つの障がい者サッカー団体と連携し、障がい者サッカーの普及・発展に取り組んでいます。これも「JFAグラスルーツ宣言」のもと、Football for All(サッカーを、もっとうみんなのものへ)という考えからです。

東京藝術大学との連携から

サッカーは文化だと思っていますから、これからもっと「文化」にしていきたいと思っています。上野は日本の文化拠点の一つですから、まず東京藝術大学と一緒にコラボレーションしていかないかと考えました。そして我々が行っている「社会貢献をいかに映像化して広めていくか」ということで、東京藝術大学と協定を結び、同大学の先端芸術表現科教授の日比野克彦さんの研究室で講座を作り、授業の一環として

やっていくこととしました。日比野さんはこれまでも九州の太宰府天満宮でアートとスポーツの共同事業をしたり、ワールドカップの時には「サッカーを応援しよう」と参道を青く染めてくれる活動を展開してくださいました。

合言葉は「学び続ける日々」

アジアの各国を周っていくと、学校で学ばなくても学べない子どもがたくさんいます。もちろん日本の中でもいろいろな事情があります。日本では学校で学ぶことを当たり前と思っているかもしれませんが、しかし他の国では必ずしもそうではないということ、そして、いかに日本は教育制度がしっかりしている国かということ子どもたちには是非理解して欲しいと思います。先生方はそういうことを含めてグローバルな視点で子どもたちの成長や発育・発達・特性に合った形で教育に取り組んでいただけたらと思います。

元フランス代表監督、ロジェ・ルメールさんが日本の指導者に言った「学ぶことをやめたら、教えることもやめなければならぬ」という言葉があります。我々の指導者育成の合言葉は、まさに、「学び続けること」なんです。



▲『障がい者サッカーHANDBOOK』
<http://www.jiff.football/handbook>

未来を生きる子ども 視座に立つ学力観を 基軸に



大妻女子大学 家政学部 児童学科
准教授 樺山 敏郎

我が国の子どもたちの学びの課題

平成28年12月21日の中央教育審議会答申の中で、我が国の子どもたちの学びの課題について次のような指摘がある。

●(前略) 学力に関する調査においては、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることなどについて課題が指摘されている。また、学ぶことの楽しさや意義が実感できているかどうか、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるといふ意識をもっているかどうかという点では、肯定的な回答が国際的に見て相対的に低いことなども指摘されている。

●(前略) 学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力には、課題があることがわかる。

こうした課題は、全国学力・学習状況調査の結果分析から得られた知見などがエビデンスとなっている。

全国学力・学習状況調査結果から得られた知見の活用

平成19年から継続して実施されている本調査における課題は、国語や算数・数学の固有の課題のみならず、他の教科等の課題でもありと捉えたい。次の2つを各教科等の授業改善の視点として示す。

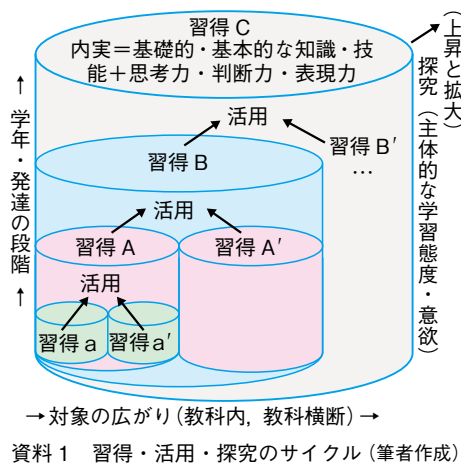
(1) 解釈や判断の理由や根拠の吟味・検討

本調査では、理由や根拠を問われる記述式の設問の正答率が十分ではない。自由な感想の表出や情報を取り出しには一定程度の成果はあるが、自分が判断したり推論したりした理由や根拠が曖昧である。第三者に明確に説明できないのである。各教科等の単元や題材における課題を解決する方略は決して一つではない。複数の手段や方法があり、複数の解答が許容される場合も当然ある。重要なことは、個々の解釈や判断に至る理由や根拠の吟味・検討の精度である。

(2) 探究の過程における習得と活用の均衡

本調査のA問題とB問題の相関関係に注目すると、小学校、中学

校共に、そして国語、算数・数学両教科において、同じような傾向が見られる。それは、B問題の正答率が高い子どもは、A問題の正答率も高いのに対し、A問題の正答率が高い子どもが必ずしもB問題の正答率も高いとは言えないことである。習得した知識や技能の足し算が順調に活用する力に転移するとは言い切れないのである。習得と活用をバランスよく加速させるには、探究の過程にそれらを意図的に埋め込みリサイクル化することが重要である(資料1)。



学びの文脈を創る授業づくりの3つの視点

今後の各教科等の授業づくりにおいては、子どもたちが学びの過程の中で、身につけた資質・能力を活用・発揮しながらものごとを

捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。それが「深い学び」の実現につながる。このことを筆者は、「学びの文脈を創る」授業と捉えている。その手立てとして、次の3点を強調する。

(1) 意味ある問いで学びを見通す

意味ある問いに必要な要素として、
 ・ 題材に対する子どもたちの能動的なかわりが期待できる。
 ・ 個別の問いが集団の問いと調和し、かつ教師の狙いに即している。

・ 前学年や前単元までに習得している知識や技能、思考力や判断力、表現力を発揮しても解決できない状況がある。
 ・ 新しい知識や技能、思考力や判断力、表現力につながる。
 ・ 多面的な見方・考え方が活性化

する言語活動が組織されている。
 などが挙げられる。授業を通して意図的に能力を育成しようとする教師と学習の主体である子どもとの実態（思いや願い）との相互作用が重要である。さらに、学びの文脈を創るために学習の見通しをもつことが重要である。全国学力・学習状況調査の結果分析において、授業の冒頭で目標（めあて、ねらい）を示す活動を行うことで、B問題の正答率が高くなる傾向が

あることが明らかになっている。

(2) 多様な考えを交流し共有する

各教科等の学びにおいて、交流は比較的に活発に行われている。しかし、交流の目的が不明確で、ペアやグループなどの学習形態や方法論に議論が終始している。重要なことは、交流によって個々の思考がどのように揺さぶられ、何が深まり、何が広がったのかというそれぞれの実感である。交流の目的は、拡散か、収束かを再検討する必要がある。交流場面では、相互の考えの共通点や相違点をシンキングツールなどによって可視化することも効果がある。交流は、多くの子どもに発言の機会が保証されるだけでなく、その交流の前と後とを比較して、個々に何がもたらされたかを把握できるようにしたい。また、表現物を通じた結果の交流のみならず、表現物に表出しようとした、思考や判断の過程を共有するようにしたい。

(3) 汎用的能力を自覚する

全国学力・学習状況調査の結果が繰り返し指摘しているように、活用の力が十分ではない。一定の知識や技能を習得していても、目的や条件、題材、場面などが違えば、それらを効果的に発動することができていない。メタ認知能力の育成が求められる。単元の出口にお

いて、どんな力が汎用的な能力として身についたかを子どもたちが自覚できるようにしたい。筆者が関わった国語科の研究指定校では、自覚化できた能力を、「言葉のお宝帳」などと称したものに年度をまたいで累積することで学力の底上げに成功した事例がある。

(4) 未来を生きる子どものために

教育界では、「改善」という言葉を容易に使う。「なぜ授業を変える必要があるのか」という根源的な問いかけが必要である。その答えは、眼前の子どもが教えてくれるに違いない。子ども一人一人が感じる難しさ、そして苦しみに寄り添うことを私たち教師は忘れてはならない。子どもの視座に立つことから、授業改善が始まる。

全国学力・学習状況調査の児童質問紙の中に、「国語の勉強が好きですか」という項目がある。平成29年度の結果は、「当てはまらない」が13・9%、「どちらかといえば当てはまらない」は25・3%。全国の約4割の6年生は、既に国語嫌いになっている。大変残念である。平均化し

た都道府県や学校全体の正答率だけでなく、子ども一人一人の解答状況に注目したい。とりわけ、無解答率の背景にあるものや、誤答の状況や傾向について、学校全体で情報の共有化を図った上で、今後の改善の方向を検討していきたい。加えて、学力向上のためには教科学力を支える周辺の能力や学習習慣や生活習慣についてもつぶさに見ていく必要がある（資料2）。

これからの予測困難な時代を生きていく子どもたちに対して、生涯学び続け、どんな環境でも答えのない問題に最善解を導くことができる能力を育成し、知的な基盤に裏付けられた技術や技能を身につけていくといった学力観を基軸に置くことが重要である。

児童生徒の学習・生活習慣と学力との関係

- ◆ 次の児童生徒ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られる【児童生徒質問紙】
- 国語、算数・数学に対する関心・意欲・態度が高い
- 家庭学習・読書
 - ・ 学校の授業時間以外での学習時間が長い
 - ・ 自分で計画立てて勉強をする
 - ・ 学校の宿題、授業の予習・復習をする
 - ・ 読書が好き、読書時間が長い、学校や地域の図書館に行く頻度が多い
- 学校生活
 - ・ 学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある
 - ・ 先生は、自分のよいところを認めてくれると思う
- 基本的な生活習慣
 - ・ 朝食を毎日食べる
 - ・ 毎日、同じくらいの時刻に寝る
- メディアとの関係
 - ・ 携帯電話やスマートフォンで通話・メール・インターネットをする時間が短い
 - ・ テレビゲームをしている時間が短い
- 家庭でのコミュニケーション等
 - ・ 家の人と学校での出来事について話をする
 - ・ 家の人は、授業参観や運動会などの学校行事に来る
- 社会に対する興味・関心
 - ・ 地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある
 - ・ 地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある
 - ・ 新聞を読んでいる
 - ・ テレビのニュース番組やインターネットのニュースを見る
- 自尊意識・規範意識
 - ・ ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある
 - ・ 学校のきまり・規則を守っている
 - ・ 人の気持ちが分かる人間になりたいと思う

資料2 国立教育政策研究所作成（平成26年度）

学習指導要領の 全面実施に向けて 取り組む校内研修



茨城県筑西市立下館小学校 校長
田沼 政志

私は本年三月まで、茨城県結城市立結城小学校の校長として勤務した。そして、この度の定期人事異動で筑西市立下館小学校に着任した。

本稿は、結城小の三年間の取り組みと、その反省を踏まえた本年四月から下館小の取り組みを紹介する。

平成27年度、29年度（結城小）

・一年間の「学力向上検証サイクル」を年度始めに示す。五月からは月毎の重点を「今月の授業改善」とし、別紙で示した。

・新年度が始まり、四月二日から五日までの午後の時間を、全体研修に充てた。結城小では毎年、新規採用者二名を含む十名を超える転入者がいる。

子どもたちとの授業が始まる前に、校長が「結城小スタイル」の授業を教室で模擬授業の形で転入者に説明し

た。「結城小スタイル」の授業とは、授業時間四十五分間を、①本時のねらい②自力解決③交流④まとめ・適用練習⑤振り返りの五段階で行う授業である。

授業者が五段階の授業構成を板書で示しデジタルタイムマーで時間調整しながら、終末の「適用練習」や「振り返り」が確実にできるようにした。

ここまでは、結城小の最も基本的なスタートラインである。異動者に対しても、十分な説明を行い、共通理解を図ることはとても大切である。

平成29年度に行った新学習指導要領の理解

文部科学省ホームページから小学校学習指導要領「総則編」をダウンロードして、夏季休業中に読み込んだ。「総則」を校内研修で取り上げて読

み深めることで、若手からベテランまで全ての教員が総則を理解して実践に移せるようになった。そして、カリキュラム・マネジメントの実現に向けた取り組みに発展した。

最重要課題は授業の質を向上させること

新学習指導要領の総則では、カリキュラム・マネジメントは三つの側面から捉えられる。一つは教科横断的な視点で教育内容を組み立てること。二つ目はPDCAサイクルを確立すること。三つ目は、教育活動に必要な資源を整えること。学校の中核にあるのは授業である。その授業の質を向上させることが、学習指導要領改訂の大きなねらいであり、そのための手法として、主体的・対話的で深い学びやカリキュラム・マネジメントが提起されている。

授業を改善していく上でポイントになるのは、子どもたちのどんな力を育てたいのかをしっかりと意識することである。より質の高い授業を追究していくと、教科の枠を超えることや、他の教科の力を借りる必要性が出てくる。

学校全体の方向性を定め、それぞれが役割を果たす

授業の質を向上させるために、どこを目指しているのかを全員が認識することが大切である。授業の質を上げるということは当然子どもたちの力を育てていくことと密接にかかわり、教育目標や教育課程につながる。



授業研究が、授業をその場限りの個人的な営みとして終わらせず常にお互いの授業の質を高め続けていこうという営みと捉える。授業者が提供してく

「授業研究」を学校経営にどう位置付けるか



第二回研究発表会 平成 29 年 11 月 1 日



県指定「授業力ブラッシュアップ・国語科重点校研究発表会」第一回研究発表会 平成 29 年 6 月 28 日

れた材料をもとにみんなが学び合える場である。

平成30年下館小の取り組み

「主体的・対話的で深い学び」の土台は何か。

下館小検証サイクルの目標(一)には、道徳科の充実と特別活動(特に学級活動・話し合い活動)を掲げた。各教科等を貫くものは、学ぶことに興味・関心をもち、自己の活動を振り返りながら改善することである。「自尊感情」「自己 有用感」といった自分から自分への評価ではなく、自分の行ったことを他人から認めてもらった、自分が相手にした働き掛けを相手から評価されたされたという、相手の存在が前提となつて生まれてくる感情である。

「温かい学級」が学習や学校生活の基盤であり、学級担任の営みは重要である

- ・児童との信頼関係を築く上で極めて大切なのは教師の愛情である。
- ・相手の身になって考え、相手のよさを見付けようと努める学級、互いに協力し合い、自分の力を学級全体のために役立てようとする学級。
- ・道徳科や特別活動の学びこそが、「主体的・対話的で深い学び」の土台である。



新学習指導要領の理念をしっかりと理解した上で教育課程の編成をする

文部科学省が作成した解説「総則編」を中心として、各教科等の解説を読み返す。その理念の中でも重視すべきものは、「子どもたち主体の能動的な学習」の構築である。子どもが本気になり、真剣に主体的

に学ぶことで、実際の社会の中で活用できるような能力を獲得できるようにする。

新学習指導要領は、学び手中心の視点で構築されており、学習者である子どもがどのように学習すれば本当の力をつけられるかという視点で考えられている。校内研修や提案授業では、子どもの学びがどのように行われているかに教師全員が意識を向けることが大切である。

授業研究のポイント

「導入」が重要である。課題や発問が子どもたち自身の問題になっているか。いかに自分の問題として解決しようとしているか。

「展開」では学習者同士の学び合いを今まで以上に積極的に取り入れる。「終末」では、時間内にしっかりと授業を収め、丁寧な振り返りを行うことが重要である。

最後に、最新情報は常に敏感に適宜に供給する。

という目的で創設しました。私はかつて企業経営者に「どうしてアイヌだとわかると採用されないのでしょうか？」と尋ねたことがあります。その方はこう答えました。「自分には差別意識はない。だから個人的には採用したいと思う。けれども、社員にそういうことを訊いたこともないから、みんなが私と同じ考えかどうかはわからない。もし、アイヌだとわかっている人を採用して職場で差別が起こり社会的問題になったら、致命的ダメージを受ける。経営者というのはリスクが少ない方を選ぶ」。しかし、ウレシパ奨学生たちはアイヌであることを前面に出して活動するわけですから、彼らが就職できる道を作る必要がありました。そのためには、企業と一緒に彼らを育てていただくしかないと考えたのです。今では、中核的に担ってくださるウレシパ・カンパニーが27社、その他の支援カンパニーをあわせるならば、40社を超える企業が会員になってくださっています。さらに、知名度の高い多くの企業がアイヌの若者たちをサポートしているという事実は、大きな安心感を与えています。



③ウレシパ・ムーブメント

このプロジェクトの重要な点は、アイヌではない学生も、アイヌ文化を学び、ウレシパ奨学生たちと共に活動する過程で「多様性」を尊重する感覚を養うことができるということです。これまでも、多くの本州出身の学生や留学生がウレシパクラブのメンバーとなり、みんなで多文化共生コミュニティーのモデル作りに参画し、その経験や成果を積極的に学外に発信してきました。ウレシパクラブの存在が認められる過程で、本学には、アイヌ民族の存在を当然のことと考え、アイヌ文化を共に学ぼうとする空気が育ちつつあります。

また、全国各地のウレシパクラブの一般会員（年会費1口2,000円）の方々も私たちの活動を支え、

アイヌ文化の発信を手伝ってくださっています。

国のアイヌ政策との連動

このようなウレシパ・プロジェクトの進展は、政府の政策とも密接に連動したものです。2008年、政府は初めてアイヌ民族を日本の先住民族であると認めました。その後、内閣官房にアイヌ総合政策室が設置され、官房長官を座長とするアイヌ政策推進会議が発足しました。

2013年、内閣官房アイヌ総合政策室が提唱し、「こんにちは」を意味するアイヌ語「イランカラプテ」を、北海道のおもてなしの言葉にしようというキャンペーンが始まりました。その一環としてモニュメントの設置が提案され、ウレシパクラブが設置主体となりました。2014年2月、JR札幌駅西改札口前に設置された「ウレシパモシロ北海道 イランカラプテ像」は今では、札幌駅での待ち合わせ場所としても多くの人々に親しまれています。

おわりに

このようにウレシパ・プロジェクトは着実に進展しています。活動の幅は大きく広がり、年に1度の文化祭ではアイヌ語劇や完成度の高い芸能を発表できるようになってきました。近年は、ハワイやニュージーランドをはじめとする海外の先住民族を訪問して言語復興の手法や精神性を学んでいます。これまでの活動が認められ、地元新聞社の大きな賞を受けました。しかしまだまだ、皆様の期待に十分応えられる力を備えてはいません。

2020年には白老町に、東日本初の国立博物館を核とする「民族共生の象徴となる空間」が建設され、年間集客目標は100万人とされています。このようなアイヌ文化をめぐるダイナミックな動きを中心的に担うためにも、さらにウレシパ・プロジェクトを進化させる所存です。ご期待ください。



アイヌ文化の担い手を育てる「ウレシパ・プロジェクト」

2010年、「ウレシパ・プロジェクト」という日本初の試みが、札幌大学に導入されました。「ウレシパ」とは「育てあう」という意味のアイヌ語です。このプロジェクトの推進母体が、一般社団法人札幌大学ウレシパクラブ（以下、ウレシパクラブ）であり、アイヌ文化を学ぶ札幌大学の学生たちと、彼らを支援しつつ自らもアイヌ文化に関わっていかうと考えてくださっている企業や一般の方々によって構成されています。当初は札幌大学内に位置づけられた組織でしたが、2013年には一般社団法人となりました。



本稿では、ウレシパ・プロジェクトの概要とウレシパクラブメンバーとして活動している学生たちを取り巻く状況についてご紹介したいと思います。

札幌大学 本田優子



ウレシパ・プロジェクト創設の背景

私は金沢市で生まれ、1983年、北海道大学卒業後、萱野茂先生（1926～2006年。当時二風谷アイヌ文化資料館館長）の助手として平取町二風谷に移り住みました。二風谷は人口400人弱の小さな集落ですが、アイヌの伝統文化を受け継ごうとする人々が多く住んでいることで知られています。ちょうどこの年にスタートした「二風谷アイヌ語塾」は、1987年に「平取町二風谷アイヌ語教室」へと発展的に改組され、私はアイヌ語教室子どもの部講師を務めるようになりました。

二風谷で暮らすうちに、私の中にアイヌの子どもの教育に関する強い問題意識が生まれてきました。一つは、大学進学率が平均値の約半分というアイヌの子どもたちに、なんとか大学進学の道を拓きたいということ。もう一つはアイヌの若者たちに自らの民族文化を学ぶ場を提供する必要があるということでした。

2005年、私は札幌大学文化学部アイヌ文化を専門とする教員として着任しました。そして2009年、思いがけず文化学部長というポストが与えられることになり、自分がなにをなすべきか問う中で、



ウレシパ・プロジェクトが生まれました。

プロジェクトの概要

ウレシパ・プロジェクトには、3つの柱があります。

①ウレシパ奨学生制度

これはウレシパ・プロジェクトの根幹をなす制度です。アイヌの若者たちの大学進学を可能とするためには、経済的問題を解決しなければなりません。そこで本学では、入学金・授業料と同額のウレシパ奨学金を給付することにしました。その代わりに、ウレシパ奨学生たちは必ずウレシパクラブに所属し、必死でアイヌ語・アイヌ史・アイヌ文化を勉強し、対外的に発信する活動を行う義務を負います。その過程で鍛えられ、アイヌ民族の次代を担う人材として育っていきます。もちろん、アイヌ民族に特化した奨学金の給付など日本では前例のないことから、学内ではさまざまな批判や反対意見がありましたが、なんとか導入することができました。

第1期ウレシパ奨学生3名が卒業したのは、2014年3月のことでした。全員、ウレシパクラブの活動を中心的に担い学業成績も優れていたということで、卒業式では学長表彰を受けました。しかもそのうちの1人の女性は、経済的な問題から大学進学を断念していたのですが、ウレシパ奨学生として社会人入学し、学年1位の成績を修めました。自らが縫った華やかな民族衣装をまとって登壇し、総代として学長から卒業証書を受け取った彼女の姿は、今も私の目に焼きついています。

②ウレシパ・カンパニー制度

これは、一般企業にカンパニー会員になっていたくことにより、就職活動の際の不利益をなくそう



▲小田原にある25の小学校のうち、20校近くの学校の子どもたちが報徳楽校に参加しています。活動は月に1回。今年はリピーターの家族が44、新しく参加した家族が13。参加するのは基本的に家族単位で、小学生が多く、今年は小学生が76名、幼稚園児が8名と保護者が参加しています。

神奈川県小田原市 報徳楽校

生きる力を育もう

神奈川県小田原市の民間団体の報徳楽校ほうとくがくこうでは、毎年秋に市内で開催される尊徳祭そんとくさいに参加しています。友達と一緒に地域の枠を超えて二宮尊徳の教えを学び、さまざまな発見をしながら友情や信頼、思いやり、寛容の心などを養うのです。

野外体験などを通して子どもたちが本来もっている「生きる力」を自覚し、育むための報徳楽校の活動をご紹介します。

地域を超えたつながり

2010年から始まった報徳楽校は、小田原報徳実践会が開校した自然学校です。小学生から入ることができ、隊員のご家族の弟妹や保護者も一緒に参加・活動しています。

小田原報徳実践会会長の横田八郎さんは、報徳楽校では通称「八ちゃん」。元・番組制作会社取締役制作部長でデザイナー、元・小田原市議会議員でもあります。

実体験を通して社会の仕組みを学ぶ

報徳市では隊員である子どもたちとその家族が作ったお米や、子どもたちが作った野菜も販売しています。作りやすく、多く収穫できるサツマイモを中心に、田嶋名誉会長の畑へも収穫に行き、みんなで野菜を

包んで販売します。「販売後、店じまいしてから原価と収支を計算し、いくら稼いだのかを確認して、子どもたちが実体験から社会の仕組みを学ぶことを大事にしています。稼いだお金は12月の餅つきや、みかん狩りの会費などにあてています」と横田さん。水野さんは、「売り上げは約4万円ですが、お米ができるまでに行った田んぼの草取り代金など労働対価を考慮してもらいます。そしてその分を推譲（寄付）する形をとります。お金の仕組みについては小さい子はまだわからないでしょうけれど、親がそういう話を聞いてくれるば、親から子へと話を伝えてくれるかも知れませんから。」とおっしゃいます。尊徳祭で得た収入は、報徳楽校で12月に行う餅つきやみかん狩りの会費などにあてているそうです。



地域を超えた友達づくり

報徳楽校活動後のアンケートでは「報徳市に行くのを楽しみにしていました」「最初は『行きたくない』と言っていた子が、報徳楽校へ行ったら嬉々として友達と遊んでいるのを見て嬉しくなりました。」などの回答が寄せられています。報徳楽校教務主任の水野和則さんは「地域を超えたつながりができることは、最初から意図していたわけではありません。」

せん。活動の結果としてそうやってきたのがすごくよかったですね。」とおっしゃいます。

社会の仕組みを知り、家族・地域の人々との交流を深め、楽しみながらよりよく生きるための知恵を深めていく、報徳楽校の取り組みです。



「地域を超えてできた友達と苗を植え収穫したお米を報徳市で販売し社会の仕組みも学ぶという体験は、子どもたちにとって大きな自信となり逞しく生きていけるのではないのでしょうか。」と水野さん。横田さんは「子どもたちが、きちんと人の話を聞けるようになったことが一番よかった。」とおっしゃいます。

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

秋田

「大館ふるさとキャリア教育」～学びの交響楽～

大館市教育委員会 教育長 高橋 善之

1 「大館ふるさとキャリア教育」が目ざすところ

大館市は秋田県北部に位置し人口約7万2千人、産業衰退や人口減少などの社会的課題を抱えた地方都市です。平成23年度から「ふるさとキャリア教育」を根幹に据え、取り組んできました。その8年に及ぶ実践と成果についてお知らせします。

未来創生戦略として、四半世紀後に少数精鋭の街「大館」を構築するために、「自立の気概と能力を備えた未来大館市民」の育成が不可欠であり、大館の総力を挙げて「ふるさとキャリア教育」を展開してきました。その過程で、「ふるさと教育」と「キャリア教育」を融合するとともに、「大館盆地を学舎に、市民一人一人を先生に」というコンセプトをもって「縦の一貫・横の連携」態勢の形成に努めてきました。

2 「百花繚乱作戦・子どもハローワーク」

「ふるさとキャリア教育」推進の主体となっているのは、各学校が実践を重ねている「百花繚乱作戦」です。それぞれの学校が地域の特色を活かした形の活動を展開しています。小学校では「大館市民基礎力」の育成、中学校では「大館市民実践力」の育成をねらいとし、各校の教育課程に組み込まれています。これらの実践を通して、子どもたちのキャリア発達が計画的に促進され、「学校は地域社会の元気の源」たる役割を果たしています。「釈迦内サンフラワープロジェクト」はその代表的な取り組みです。

また、平成24年度から立ち上げた「子どもハローワーク」もあります。このシステムは、市内外の企業などから土日や長期休業期間の「職業体験」や「ボランティア募集」を市教委が受け、その募集票を全小中学校に掲示し、希望する子どもたちが自らFAXにて申し込むというものです。5年間で1万人を超える子どもたちがこれを活用し、キャリア発達だけでなく、市民意識や自己有用感の高揚にもつながっています。

3 授業イノベーション「教学から響学へ」

「未来大館市民」としての子どもたちの能力を育成する実践は、授業にも及んでいます。3年前には「講義型授業禁止令」を発令し、授業イノベーションを促してきました。現在では「共感的・協働的学び合い（響学）」に進化し、全小中学校が共通して実践しています。

結果として、「主体的・対話的で深い学び」を先行した授業型となっており、さらには、それぞれの学校の特色や工夫が加わり「授業の百花繚乱」の様相を呈しています。その中でも花岡小学校の「チャレンジ授業・ベーシック授業」は最先端の取り組みです。大館の高い学力は、このような授業（響学）により培われています。

4 「学びの交響楽」へのご招待

本年、10月9・10日に、本市を会場に「秋田県学力向上フォーラム in 大館」を開催します。例年、全国から千人を超える参加者のあるフォーラムですが、大館では新たな試みとして、市立の全小中学校25校の授業を公開します。

もちろん、すべて「共感的・協働的学び合い（響学）」を核とした授業であり、教科授業だけでなく、道徳や小学校外国語活動、支援学級、複式学級の授業なども準備しています。授業参観後には、各校でワークショップ型の授業研究会も行う予定です。詳細な情報は、大館市教育委員会のホームページに掲載していますので、全国からのご参加をお待ちしています。

南から



群馬

この学校で学べてよかった
地域が応援したくなる教育活動を推進する学校

高崎市立中川小学校 校長 佐藤 朋子

高崎市立中川小学校は、本年度開校140年目を迎える歴史と伝統のある学校です。開校以来、教職員と保護者、地域がともに力を合わせ、その思いを集結した学校を築き上げてきました。現在学校では、教職員が461人の児童と「なかよく かんがえ がんばる わたしたち」を合い言葉に明るく元気な学校を目指し、地域が応援して下さるさまざまな活動に取り組んでいます。

一つ目は、地域の人材活用です。地域の外部講師が、天体の話をしてくれたり、公民館のボランティアが、絵本の読み聞かせをしてくれたり、放課後学習会に算数の学習を手伝いに来てくれたりたくさんの方々が学校を応援してくれます。

二つ目は、地域全体が協力して行う活動です。休日に科学教室やダンスセミナー、校区の運動会など多くの活動を行います。中でも珍しい活動は、秋に行われる「うどん打ち」です。群馬県は小麦の産地で、うどん作りが有名です。「うどん打ち」とは、地域でとれた小麦を提供していただき、学校に集まった児童にうどんの打ち方を教えてくれる活動です。

三つ目は、育成会活動です。写生大会や球技大会などさまざまな活動をしています。中でも特徴的な活動は、毎年冬の時期に行われる「上毛かるた」です。「上毛かるた」とは、昭和22

年に作られた郷土カルタで、群馬県全体の地域で広く親しまれている全国でも珍しいカルタです。

このように、本校では、地域が応援して下さるさまざまな教育活動を推進しています。これからも児童に、「この学校で学べてよかった。」と思ってもらえるような学校にしていきたいと考えています。



の工夫へと発展させていくことは、上学年における「探究活動」にもつながると考えています。

昨年度から市立こども園のアプローチカリキュラムを協働で検討し始めました。



静岡

ゼロからのスタートではない、幼小接続の実践
上学年の「探求活動」へつながる取り組みへ

静岡市立蒲原西小学校 校長 山口 恭正

本校は、スタートカリキュラムに取り組んで8年が経過しました。平成27年度からは、学区内の市立こども園と交流を始め、翌年度には私立幼稚園にも広がりました。

5年生の総合的な学習の時間では、卒母園で年長児と触れ合う活動を取り入れています。11月の就学時健康診断の前に園を訪ねて、交流の機会を3回ほどもちました。健診時には、年長児が5年生と親しくなって、安心して小学校へ来ることができます。この関係が、入学後の1年生と6年生との信頼関係に発展していくように実践しています。

また、昨年度からは校内研修とし、夏季休業中にこども園の保育参観を位置付けました。小学校教員が複数職員で参観することで、気付きを共有したり、保育者と意見交換したりすることがスムーズになりました。

4月からのスタートカリキュラムでは、1年生が全校児童と4月中にかかわるように計画しています。2年生は学校を案内し、3年生は校歌を教えます。その際、上学年児童から教えるのではなく、1年生が教えてくださいとお願いするスタンスを大切にしています。

このように、小学校生活への適応を重点とする「なかよタイム」から、生活科を核にした合科・関連的指導で学びをつなぐ「わくわくタイム」へシフトしてきました。さらに教科指導

「遊ぼう！ 写真はことば」 で考える「写真という物語」

兵庫教育大学 羽田 潤

写真のことば

写真という切り取られた一瞬間には、さまざまな物語を読み取ることができません。フレームの中に収められた人物の表情、動作、服装、髪型、小道具、大道具、背景、時間、空間、それがアップなのかロングなのか、正面からなのか斜めからなのか、または、そのフレームの外には、その時間の前後には何があるのかなど、一枚の写真の印象を形作る要素は非常に多様です。「遊ぼう！ 写真はことば」の第一章「写真のことば」には、「写真」という意味を構成する「ことば」が紹介されています。「文章（物語）」が「ことば」の集まりによって意味を成すことと同じように、「写真」は、これら要素の集まりによって、「物語」を形作ります。

おしゃべりな写真

では、どのような要素がどのような物語を生み出すのでしょうか。第二章「おしゃべりな写真」の一枚目には、この写真を配置しまし



た。背景が無地のこの写真Aは斜め上を見上げる赤ちゃんの視線が気になります。口元や目の形から微笑んでいるようにも見えます。そのあと手元に目を向けると何かを持っていることがわかります。この手に持つ何かよりも興味を引くものが赤ちゃんの視線の先にはあるのです。今にも何かを話しかけそうなくらい、赤ちゃんの姿勢には対象に対する興味の強さがうかがえます。表情、姿勢、動作、小道具、服装、これら要素の読みが（意識的にせよ、無意識にせよ）集約されて、この写真の「物語」となって表れてきます。情報量が少ないようで、部分を詳しく見ていくと多様な読みが可能になる一枚です。

では、左の写真Bはどうでしょうか。さらに情報量が増えました。被写体の年齢も上がり、より複雑な感情を読み取ることができそうです。情報量が増えたことで写真が示す情報の質に物語が焦点化されていくともいえます。



「写真の物語」を読み取る上で、写真Aが基本、写真Bが応用というように考えてみましたが、写真Aのほうが、自由度

写真という教材

以上を示したように、この冊子では、段階的に「写真という物語」が考えられるように写真や活動を構成してみました。国語科教科書では写真を使った物語創作などが教材化されていますが、誌面の都合や著作権の問題もあり、教室での活動に十分に応えられていない面がありました。今回、カメラメーカーさんと議論しながら、プロが撮った写真を何百枚と広げながら写真を選択していくという贅沢な作業ができました。このような形での教材制作が今後ますます増えていくことを願っています。

「写真の物語」を読み取る上で、写真Aが基本、写真Bが応用というように考えてみましたが、写真Aのほうが、自由度が高いとい



う観点では、「物語」の難易度があがるのかもしれない。

では、写真Cはどうでしょうか。後ろ姿にはさまざまな物語性を付与することができま

高大接続改革について(2)

英語試験と CEFR



独立行政法人
大学入試センター
審議役大杉 住子

(前 文部科学省初等中等教育局
教育課程課教育課程企画室長)

「大学入学共通テスト」を初めて受験することになる生徒が高校1年生となった本年度は、2020年度に向けた実施準備と平行して、情報提供の充実により一層努めていきたい。特に英語試験については、2023年度まで民間の資格・検定試験と大学入試センターが実施する英語試験との併用が決定されており、文部科学省と連携して仕組みの経緯や概要などについてももしっかりお伝えしていかなければならないと考えている。

「大学入学共通テスト実施方針」において英語試験の併用が決定されたのは、実施方針確定前の昨年5月、2020年度から資格・検定試験の活用に一本化するか(A案)、センターが実施する英語試験も実施し資格・検定試験と併用できることとするか(B案)の2案に対する意見募集を行ったところ、制度の大幅な変更への影響を考慮したB案が支持を集めたことが背景となっている。これに基づき、大学入試センターは2023年まで①「大学入試英語成績提供システム」を通じて資格・検定試験の活用を支援すること、②大学入試センターが直接作問する英語試験の実施を担うことの二つの役割を担うことになる。

「大学英語成績提供システム」は、一定の参加要件を満たすことが確認され、試験実施主体とセンターとの間で協定書が取り交わされた資格・検定試験について、受験生から大学への成績送付の依頼があった回の成績をセンターが一元的に集約し、大学などに対し提供するものである。提供する成績は、各試験の実施主体が定めるスコア(バンド表示も含む)と、「外国語の学習、教授、評価」のためのヨーロッパ共通参照枠(CEFR)の会談別表示、合否がある場合はその合否を基本とすることとしている。

このシステムの参加要件を満たしていることが確認された資格・検定試験を先日公表させていただいた。文部



科学省からは同時に、これらの試験とCEFRとの対照表も公表されたのでHPなどでご確認いただきたい。対照表にスコアの記載がない欄があるが、これは各試験において当該欄に対応する能力を有していると認定できないことを意味している。また、複数の級などから構成される試験は、それぞれ測定できる能力の範囲が定められている。こうした仕組みを踏まえれば、生徒の進路や英語力の状況に応じた適切な試験を選択して受験することがこれまで以上に重要となってくる。

資格・検定試験は目的に応じて幅広い英語力を把握でき、大学の判断により多様な結果が活用される可能性があることから、「大学入試英語成績提供システム」を通じて成績提供する範囲もA1～C2の幅広い範囲が想定されている。一方でセンターが作問・実施する英語試験については、英語以外の科目と同様、高校教育を通じて大学教育の基礎として共通に求められる力を身につけているかどうかを把握することが目的となり、CEFRとの対応ではA1～B1相当の出題となる予定である。

試行調査の趣旨及び概要、試験問題やねらい、結果、自己採点用紙等については、大学入試センターのホームページをご覧ください。

大学入試センター 試行調査



CLICK



イラスト ひらた ひさこ <http://www.hisako-hirata.com>

第16回

地球となかよしメッセージ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会 ◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

教育出版

「地球となかよしメッセージ」事務局

TEL 03-3238-6864 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

作品募集

(2018年7月1日
～9月30日)



*第15回(2017年度)作品のお問い合わせについても、「地球となかよしメッセージ」事務局へ。

働きながら学び合い、 尊重し合う

ほ・っ・と・な・出・会・い

日本理化学工業 代表取締役社長

大山 隆久 さん



社内の窓ガラスにキットパスで描かれた作品

うにもならないな」と思った時、以前あるお寺での法要の際に、ご住職から教えていただいた言葉思い出しました。「人間の究極の幸せは、人に愛されること、人に愛されること、人に愛されること、人の役に立つこと、人から

「働く経験をさせてあげてください」

知的障がい者雇用を始めて、来年で60年になります。前社長だった父の話では、昭和34年の秋に世田谷区の青鳥（せいちょう）養護学校の先生が二人の女性の就職依頼にいらしたのがきっかけです。最初は何度もお断りしたのですが、三度目に「二人の就職はあきらめず。でも、今就職できないと一生働くことを経験せずに生涯を終えてしまっても知れませんか。数日経っているので働く経験をさせてあげてください」と。話を聞いた父は「では二週間、実習をお引き受けしましょう」と実習が始まりました。

「私たちが面倒を見ます」

実習は箱の側面にシールを貼る仕事です。二人の女性には昼休みになっても、社員が「休憩しなさい」と声をかけるまで作業を続けてくれて、二週間の実習が終わる頃、社員たちが口々に「あの子たちを採用してあげてください。できないことがあったら私たちが面倒を見ます」と言ってくれたそうです。「みんながそこまで言うてくれるなら」と採用を決めたのが始まりです。

人間の究極の幸せとは

今は社員の7割以上、86名中64名が知的障がい者で、そのうち26名が重度障がい者です。こんなに長く続けられるとは想像していませんでした。父の話によると最初は作業の仕方をわかりやすく教えられず、忘れたらまた教えることの繰り返しでした。説明しても伝わらないストレスが一番大きかったです。「もうど

必要とされることの4つです。そして愛されること以外の三つは働くことで得られる幸せです」。この話を聞いた父は「働く場で提供できる企業だからこそ、人の幸せに直結するような場を提供できる。うちの会社でできる役割を意識してみんなで頑張ってみよう」と心に決めたと聞いています。

人に作業工程を合わせる

ある時、父は「いくつも信号があるのに一人で出社している」ということは、信号の意味を理解しているということだ。作業工程を色で管理してみたらどうだろう」と思いつきました。「相手の理解力に合わせた段取りをして教えて、手順を覚えてもらえばいい」と気が付けたのは大きな発見でした。さらに、「工程に人を合わせる」のではなく、「まず手順を覚えてもらってから作業すれば、彼らのよさをもっと引き出してあげられるんじゃないか」という思いから「人に工程を合わせる」ことが、今まで障がい者雇用を続けてこられた大きな原因のひとつでした。ただし、いくら工夫しても作業する本人たちが頑張ってくれなければ生産性は上がりませんから、彼らが安心して働ける環境や居場所作りも大事です。

うちの会社が今あるのは、いろいろな人が応援してくれた結果なんです。昭和50年に現在の場所に移りました。当時は助成金制度などなかったのですが自分たちが資金を工面しなくてはなりませんでした。偶然飛び込みでうちの会社に来てくださった銀行員さんに父が事情を話したら、奇跡的に融資してもらったことがありました。

環境に優しいチヨーク作り

12年ほど前から、ホタテの貝殻をリサイクルしたチヨーク「キットパス」を北海道で製造しています。最初は貝殻の不純物や匂いを取り除いていなかったのですが「これは使えないな」と思っていたら、北海道庁やホタテの貝殻リサイクル業者さん、道立試験場などを紹介していただいて、リサイクル技術も高めていたという結果、「環境に優しいチヨーク」としてさらに多くの方々から信頼を得られました。窓ガラスなどに描いて消せる、口にしても害のないチヨーク「キットパス」の誕生です。長年障がい者雇用をしてきたので、製造過程では自治体も応援してくださいました。だからうちは、障がい者雇用のおかげで今がある会社なんです。もっている能力が決して高くなくて、周りが支えたらどんどん成長していきます。高い能力ももちろん大切だけれど、やっぱり人柄が大事です。人間的に素晴らしい人が、会社や組織を支えるんだなと思います。

働きながら学び合い、尊重し合う

会社が本当に大変な時も、みんな支えてくれるんです。ぼくらは彼らに仕事を教える立場で、飾らない人たちだから、自分も絶対に彼ら彼女らに嘘をついてはいけないと思っています。ぼくは彼らのように上手にチヨークは作れないから、ぼくのできることを一生懸命やればいんだと思っています。もちろん、それぞれの役割の中で尊重し合いながら、みんなよい仕事ができたらいいと思います。小さな会社なので利益を上げるのは大変なことです。戦力になってもらうために雇用した責任があります。一人一人が生懸命に仕事をしますし、そういう思いを直接伝えていくから他の社員もがんばってくれるのだと思います。

尊敬と感謝

以前ぼくは「障がい者は仕事ができない人だ」と思っていました。チヨークの需要も減って、このままでは会社として存続できなくなるかも知れないという危機感から、ダメだと思うところばかり目につく時期もありました。でも一見簡単そうに見える作業も、社員と一緒にやってみると「大変だな、これは自分ではできないな」と、みんなの苦労が見えてきました。そしてなぜこの会社がこれまでやってこられたのか、なぜこの会社がたかくさんの人たちに支えられてきたのか、が少しずつわかっていくと、自然に社内外の人たちの尊敬と感謝の気持ちが湧いてきたんです。「すごいなあ」と。人は一人一人違うのに、思い込みで相手を評価したりしがちです。でもそれぞれの違いを受け入れられたら、すごく楽になります。「みんな同じ」ではないからこそ、それぞれ果たすべき役割とがあり、そこでお互いに尊重し合えたら、本当にうまくいくと思えます。でも相手を敬う気持ちがないと反感やいじめにつながることもあると思います。例えば、「メールしたからわかっているだろう」で済ませて行き違いが起きることもあります。うちの会社も、障がい者の社員たちにはです。でも、健常者同士ではそういうことがまだあります。もっとお互いを尊重し合うことができたら、もっといいんなことが楽に見えて、「余計なことにとらわれないで自分の役割を果たしていこう」と、すごく素直に取り組んでいけるんじゃないかと、ぼくは思っています。

おおよま たかひさ 1968年東京生まれ、中央大学法学部卒業後、日本理化学工業に入社。平成20(2008)年より4代目社長に就任。
日本理化学工業株式会社 〒213-0032 神奈川県川崎市高津区久地2丁目15-10 電話：044-811-412-1

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆食育先生、がんばっていますね。内容が示唆に富み、考えさせられるものばかりでした。幾度も読み返しました。(北海道 S.K)
- ◆巻頭の知花くららさんへのインタビューの、国連WPFについては全く知識がなく、このような活動があることや活動内容を初めて知ることができた。このような記事を今後もぜひ取り上げていただきたい。(福岡県 T.M)
- ◆「遊ぼう！ 写真はことば」は興味をもった。一枚の写真から子ども目線で物語ができあがり、ワクワクするような夢を感じる。次回からの掲載を楽しみにしている。(愛知県 Y.T)



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていくこととする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。